



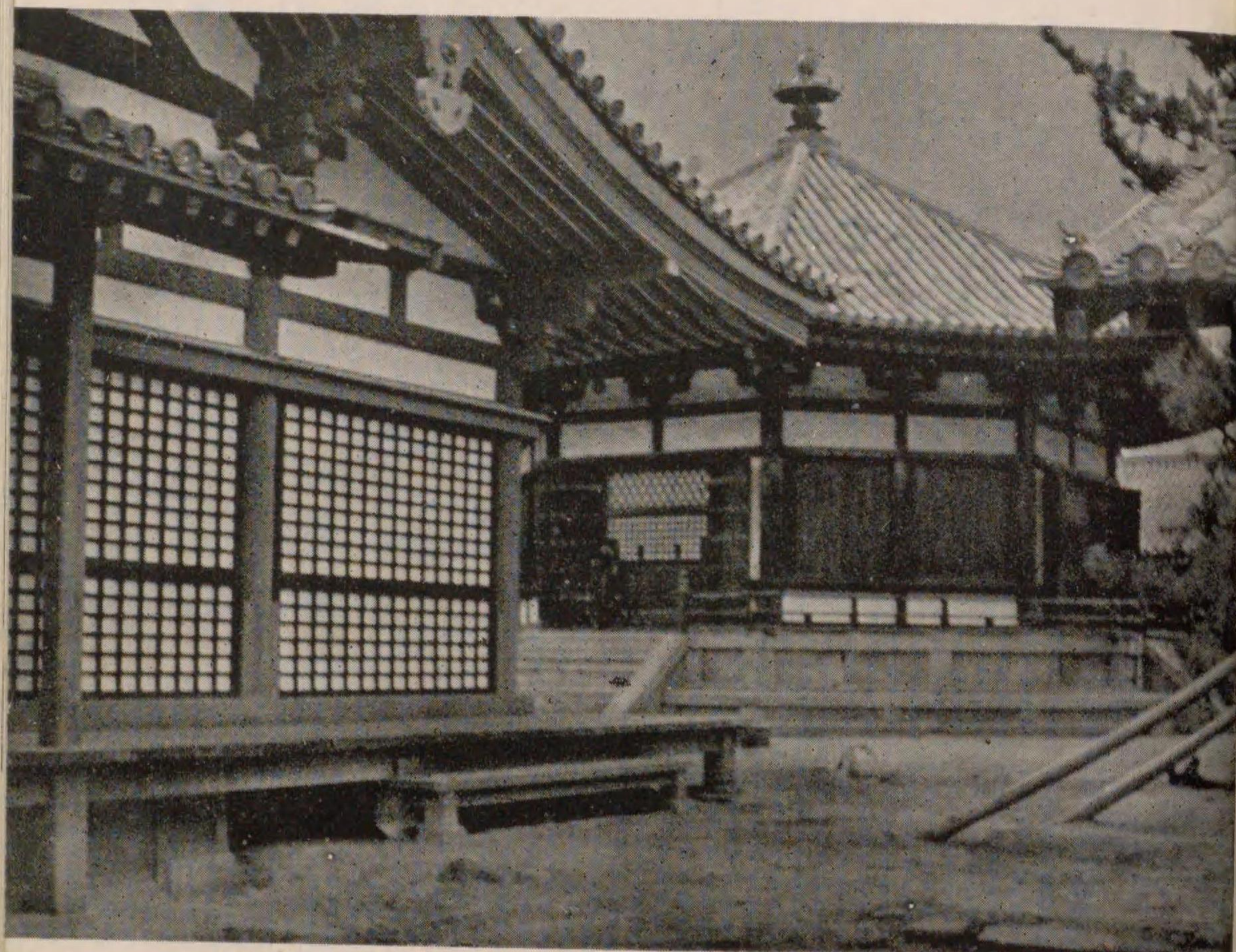
廻廊を越して金堂の屋根が見える

ロライフレックス 4×4  
パン F フィルム  
フィルターなし  
f 5.6 1/25 秒

私は尊い像に盡きぬ魅力を感じて眺めて居た



(山田氏寫)

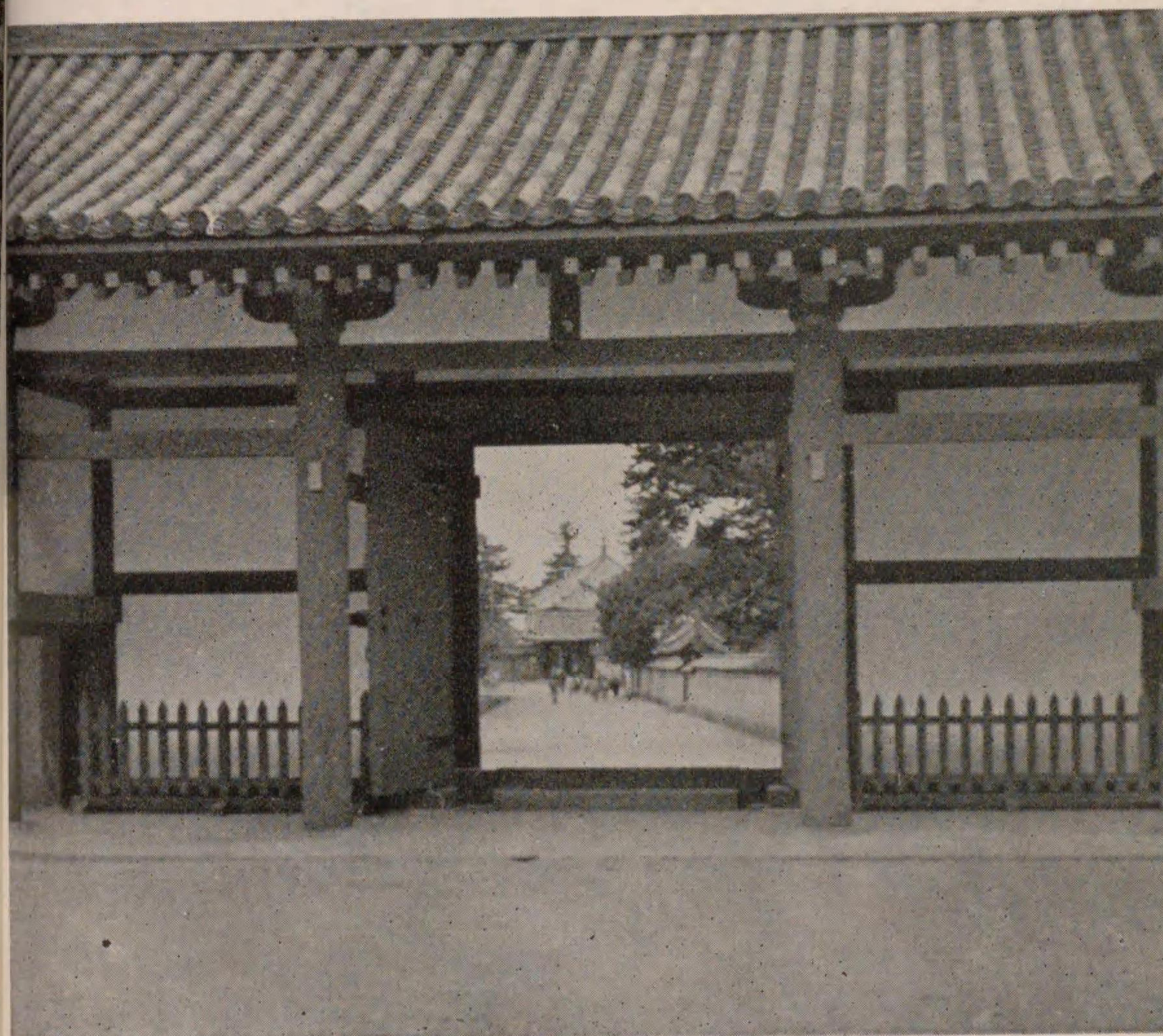


夢 殿

ロライフレックス 4×4  
テツサー f2.8  
パン X フィルム  
黄 2 號 フィルター  
f5.6 1/25 秒

東門から遙かに  
夢殿が見える

ベビーパール オプター 4.5  
さくらパン F  
f4.5 1/25 秒



夢 殿

夢殿——何んと云ふ幽幻な響きを持つ名稱であらう。古い古い法隆寺の中門、五重塔、金堂などの尊さに對して、また私共は違つた意味で夢殿を特に慕ひたい氣持ちになつて來るのである。

私は一通り法隆寺を今見て廻つた。然し時季の關係で、壁畫や寶物の拜觀は叶はなかつたが、寧ろ多くの尊いものゝほんの一部分のみを拜觀し得て、それで天平時代のすべてを想像し得るものではないと思つたから、又の機會にゆつくり見られる。それまで自分の方で研究の歩を進めて置く事が肝要だと考へた。

夢殿は法隆寺の地つきではあるが、東大門から三丁程東の方に距たつて居るのである。

こゝの地は平坦で、今は附近が割合家ごみになつて居つて廣々とした感じが無いが、こゝ東院の門内近くに、私共憧がれの夢殿の八角圓堂が見られた。寺の門番らしい人の以外にそこに居るのは私人だけで、たゞ門の外には數人の子供等の騒ぐ聲がするのみであつた。

堂は古びてかなり荒廢して居り、それが尊さを一層覺えしめたが、つい此間二度目に行つた時は根本的の改修工事が行はれて居たから、恐らくもう私の見た時とは違つて、朱塗の柱も新しく、屋根瓦なども新規のやうに手が入られ、倒れかかつて居た廻廊の支柱なども無くなつて居る事と思ふ。餘り新しいより荒廢して居る有様の方が想出の多いやうな氣がする。さりとて荒廢のまゝ朽ち果てる事などは出來ず、常に補修して永久に保存せらるべきものではある。

もと此地に聖德太子の宮殿斑鳩宮いかるがのみやがあつたと云はれる。太子はその一室で十七條の憲法を書かれたと云はれ、又場所は其處ではないとの説もある。兎に角夢殿は太子が佛教を御研究せられたところと云ふ事は間違ひないであらう。私は石段から堂に上つて格子の間から堂内を覗いた。暗い堂内には結構な御本尊の御姿がかすかに見える。



太子は推古天皇の十七年の頃、勝鬘經しょうまんぎょうと維摩經ゐまけきょうと法華經ほっけぎょうとを自ら筆を御執りになつて註釋せられた。これが有名な三經の義疏ぎそといふものである。此御製作の間に屢々難語句に御出遇ひ遊ばされるや、太子は晝間となく夜となく、必ず夢殿に入られせられたのである。

風冷たき夜が闌かけて、片割月が山の端にかゝり、微かな月影が御堂の格子から堂内の床に映じる時などにも、足音も靜かに渡廊の上を進ませられた太子の御姿は、聽てこゝの御堂の中に消され、聽て薄暗く御明しの光が洩れて、太子が三昧に耽たけられて居る事を拜察された光景を、今私は此廊下に立つ時想像した。

傳へらるゝところによれば、斯く心を落つけられて佛教の解義に專念せらるゝ毎に、必ず何處からともなく金人が現れて「この所は云々と解とすべきで御座います」と、その難語句を詳しく説明せられたとある。

夢殿に入られた太子は三日でも七日でも御出ましにならぬ事が常にあり、此間人々は「太子様は、いま夢殿にお入りになつてゐらつしやるから、太子様の御夢見を御妨げしてはならぬ。出来るだけ靜かにせねばなるまいぞ」と申し合はせ、常によい御夢見を御援け申したと云ふ。實に隋が亡び唐の興



### 中 宮 寺

夢殿に隣接する有名な傳法堂の直ぐ東北に接して中宮寺がある。斑鳩尼寺と名づけられたものである。この御本尊の彌勒菩薩こそは藝術的に見ても天下一品の傑作と云はれ、うつとりと閉ぢた眼、かすかにほゝえむ唇、美しい指先を軽く頬にふれた有様、肉つきの柔和さ、それは人間の心の奥に籠る慈悲の願望を結晶せしめた表現だとききつゝ、成る程と像に見入る。此圖は門の外から落ついた堂の屋根を見返りながら寫した。

ベビーパール オプター 4.5 (ソフト引伸)

つた支那一流の國家的改變の様も太子の御耳に入るまでには之等のゆきさつがあつたと云はれる。

夢殿の傍に南門、一名不明門あかすのもんといふ門がある。名をきくと何か鬼怪や魔物に關係があり、崇りなどがあるらしく思はれるが、此やうな名前のついたところが平安朝は勿論、江戸時代になつても大名屋敷などによくあつた。即ち不明の間とか不明の門とか、現在でもこれに類するものが日本にも外國にも稀にあるやうであるが、天平奈良時代を考へる時、そこに何か色々の物語もありさうに思はれて、少なからず興味を感じる。

夢殿の近くに中宮寺があり、又一々注意して見落しのないやうにせねばならぬ寺や建物やらがある。その一々を記したいが、こゝに暇がない。



### 片割月

晩秋の奈良の野邊の夕方程物淋しいものはない。あらゆる近代文  
化も夜の闇に包まれてしまった時は、私共にたゞ太古のまゝの姿  
の奈良の感じが迫つて来る。つい過ぐる日、奈良の町から遙か南  
に大和の野を日の暮に歩いたが、片割月が土壁の農家の屋根に低  
くかかつて居た。ベビーパール・オプター 4.5、絞 f 4.5、 $\frac{1}{25}$   
秒、フィルターなしでそれを寫して見た。

## 聖徳太師の御徳を偲ぶ

聖徳太子は英邁にあらせられ、餘りに其御事蹟に就いて記すべき事が多くあるが、當時の支那の勢力が盛んな時であり、學問も進んで居り、それが爲か驕高ぶつて居たに拘らず

「日出づる處の天子、書を日没する處の天子にいたす、恙なきや」

と少しも恐れず、この國書を送つて對等の附合をされた其堂々たる御態度に就いて吾々は感激せざるを得ない。

今や皇紀二千六百年の輝かしい年を迎へ、此世界の混沌たる動亂状態の中に獨り我國のみ千古不變の姿で立つて居る。これぞ此時、特に必要なは此聖徳太子的精神である。曰く自主と包容である。

自主とは如何に優勢なる者に對しても卑屈ならず、怖るゝ念を抱かず、正しき事は堂々主張し、對等の禮を以て臨む事に外ならぬ。包容とは弱小たる者をも侮らず、且排外的ならずして廣き度量を以

て世界の長所美點を採用するの心である。此太子の鞏固なる自主的精神と博大なる包容的精神との合致こそは、今日も堂々日本精神の根本であるとして少しも搖ぎないところであると云ふ事が出来る。

太子が我が國體が何處の國にも侵されぬ事を充分自覺せられて先の如き國書を發せられた。それを受けた隋の煬帝の心はどんなであつたか、想像されるではないか。正義正理正道の前には怖るゝものはなく、太子の御言葉の「將に斷ずべきにあつて斷ぜざれば亂を招ず」眞に然りであり、實によく今日の世界にもあてはまる。

私は千三百年餘に溯る古都を歩きながら斯く想ふ時、他國の古都の多くが徒らに廢墟として旅行者を迎へるに過ぎないに反して、吾々の古都奈良から大和の地が、現在に於ても尙帝國の國都として吾國民の上に堂々古き帝都たるの偉力と使命とを些の變りもなく發揚しつゝある事が、皆太子の比類なき英邁の御人格によるものと想つて、實に感極まる次第である。斑鳩の野末に照る秋の陽光は、舊都の秋の感傷的な淋しさを感ぜしむるものではなく、それはたゞ一人今此里を歩みつゝある私一個の旅行者の心にも、強い明るい光として大きな希望を與へるものである。

## 龍田川の溪谷へ

法隆寺から歸らうと思つた時、ふと一層此近くの龍田川まで行つて見やうかと思ひついた。秋である。歌に残る龍田川の秋色を賞でるのも興が多いと、心に希望を描いて法隆寺の塀傳ひに南に道をと、間近い龍田町に入る。町の龍田神社を過ぎて間もなく橋を渡る。

左に行けば王寺の町、右に堤傳ひに行けば龍田川に沿ふて上るのである。此川は生駒山の東の谷で源を生駒トンネルの東口の邊に發する小流なのである。此橋の附近上下數丁の間には殊に楓が多く、下流六丁程の所に三室山がある。「あらし吹く三室の山のみぢ葉は龍田の川の錦なりけり」とある如く。

秋は既に深く、谷は落葉繁く雑木林は黄に染まり、紅葉は古のまゝの美に燃えつゞけられて居た。あゝ來てよかつたと思はず喜んだ。

街路は良く、歩くにも少しも骨が折れぬ。然し私は此色彩美に對し、無色の寫眞の力なきをつくづく感ぜずには居られなかつた。此日天然色の材料を持つて來てない。常ならばコダクロームの準備もあるが、既に事變後手持ちの全部を費ひ果してしまつたから何うにもならぬが、私には幸に繪の具の用意がこんな時に思はぬ満足と與へて呉れる。

龍田川は割合舊都に近い地に地位を占め、既に古く人々に知られたのも、遊歩に便利であつたせいでもあらう。

私はこゝに來て居る間に春日奥山の鶯の瀧の附近の秋を比較して考へた。あの邊は谷がもつと深く山路もかなり苦しいらしい。私が此間行つた頃は立派な自動車専用路を走つたからこそ、さう遠いとは思はなかつたが、小徑も通ぜなかつたであらう古い春日の奥山は、當時遊覽の人は縁の無かつた所であつたからに違ひない。殊に春日山は神祕境で、山の主の神を怖れて或は常人が濫りに入込む事が出来なかつた事も想像される。然し今日龍田川を見るか或は鶯の瀧を見るか、いづれも奈良の山々の秋を探るには甲乙の無いところであるやうに思はれる。

さて今私が歩むこゝの邊りは、古の歌に出てくる龍田川の地ではないと云ふ事をきいて居る。本當



は此下流十數丁を西に流れる大和川の邊りださうだ。私は其大和川の方まで行かなかつたけれども、こゝに充分古歌の想出にふける事が出來た。業平の歌にある

「千早振神代も聞かず龍田川、から紅に水くゞるとは」

は誰も知るところであり、古今集に

「立田川もみぢ葉流るゝ神名備の三室の山にしくれふるらし」

とあり、まだ名歌も盡きないが、歌によつて或る土地、それが今日實際に訪れてたとひつまらぬところでも美化されて居る事を感じる場合がかなり多い。然し秋はいづこの山にも美しい。それが龍田川であればこそ餘計清く美しく覺える。

さて行くあてもない道を何處まで溯るも同じだと思つて、もと來た道に戻る。

### 耳成山みみなしやまに歩む

奈良に生まれ奈良に住む人は、何時でも好きな時に心ゆくまゝに奈良朝の研究も實地について出來やうが、私の如き旅行者は、たゞ一度こゝに來て、忙しく名所見物をする位では、到底、目的を果す譯には行かない。

それ故私は此度は建物だけを見る事にしよう、此次は佛像を中心に見て歩かう、などと其時一々に目的を定めてこゝに來る事にして居るのであるが、昭和十四年の春四月の旅には、たゞ大和三山即ち畝傍、耳成、香久山を眺めたいと思つて態々來たのである。

然し私には未だ暇が充分になかつた。こゝに來て三山を思ひのまゝに訪れるには、僅か二三時間では到底出來るものではない事を充分に心得て居たが、然しなるべく巧みに此目的を短時間内に果す爲に、かなりの苦辛をした。



八木町の北から見た耳成山

ベビーパール ヘクサー 3.5

パン F フィルム

黄 2 號 フィルター

f 5.6 1/25 秒

私は奈良を午後三時頃立つて大軌電車の神宮前驛行に乗った。そして八木の驛で下車した。八木の町は町の割にかなり立派な大道が通じて居る。電車道の下を潜つて北に進んだ。此道を行くと先きは義太夫にある新口村である。

春の畑には稲がよく伸びて居る。私は一人のん氣に畑道を歩むのであるが、汗ばむ程暑い。畑の中には數軒の農家と牛小舎がある。牛小舎の前には村人が大勢して表面に牛塚と刻んだ石碑を建てて居る。私は木原の里の白壁の落ついた寺の姿に心が惹かれた。

細い小川がある。其小川の岸の道ばたの草に坐して、靜かに東の方、耳成山を眺める事にした。眼の前の川端に猫柳が芽をふいて居る。其枝越しに稲田が和やかな風に波を打つて、遙か空にはくつきりと耳成山が聳え立つ。此風景をベビーパールに赤フィルターを附けて寫した。

耳成山は低い饅頭のやうな、又笠をふせたやうな行儀のよい山で、それよりも低い丘のやうな山である。高さ一三八米で、トロイデ火山である。天神山とも稱せられて山々はくちなしの木が多い爲にくちなし山とも云はれる。廣野原に立つ此山に登つて、大和國原を一目に眺めた景色はどんなであら



大和三山の姿（耳成山）

ベビーパール ヘクサー 3.8

パン F フィルム

赤 1 號 フィルター

f 3.8 1/25 秒

うかと想像して見た。

今こゝの野に立つ私は畝傍は何處かと振向いて見た。然し電車軌道の高い築堤に防げられて見えなかつた。それ程に畝傍山は低いのである。これも高さ一九〇米と云ふ丘のやうな饅頭山で、やはりトロイデ火山である。

畝傍は諦らめて、東の方の空に天の香久山を求めた。これも電車道の蔭になつて居るのでこゝよりは見られない。私は村人に香久山には何う行けばよいかと尋ねた。



夕映ゆる頃

ベビーパール ヘクサー 3.5

さくらパン F

フィルターなし

f 3.8 1/25 秒

## 藤原京の地に

それから数時の後、私は八木町の遙か東南の方の野を歩くのであった。こゝに來れば、東の方に天香久山が低く笠のやうな姿に眺められる。或る古びた村蔭に荒廢した大きな名も知らぬ古寺の甍を見上げて私は過ぎた。

此山は他の二山がトロイデ火山であるのに反して、高さ一四七米の花崗岩の山である。私が未だ飛鳥川の近くに來る前に、もう其邊の野には夕暮の霞がかゝつて來た。此靜かな野路を一人たゞ香久山をめざして歩む自分の姿を思ふ時、私は何か孤獨な淋しいやうな氣がして來た。

附近には野良仕事を了へたらしい農夫の家族が火を燃して藥罐をかけ、それを取り圍んで樂しげに語つて居る。私は言葉をかけて見た。天香久山の寫眞を寫しに來たがもう遅くなつてしまつたと話し



暮色に煙る天の香久山

ベビーパール ヘクサー 3.8  
パン F フィルム  
フィルターなし  
f 3.8 1/25 秒

た。カメラを手に持つて寫せるか寫せぬかと云ふ暗さになつて居るが、兎も角も記念撮影のつもりで又ベビーパール ヘクサー 3.8 を一杯に開いて 1/25 秒で寫して見た。何うやら寫つて居る。

香久山と云へば直に萬葉集にある持統天皇の御歌

「春過ぎて夏きたるらししろたへの衣ほしたり天の香久山」  
を想ひ出す。又後世になつてからの私の好きな歌として

「見渡せば天の香久山畝傍山あらそひたてる春露かな」

(賀茂真淵)

がある。ふと後をふりむけば、畝傍山もこゝでは天の香久山とどちらが大きいかと思ふくらゐに、此歌の通りに見えて居る。

風生の句に「稻かけて天の香久山かくれたり」と云ふのがあるが、今私がこゝで寫した寫眞的に見では失敗に近い作品が、偶然此句に似て居ると思つた。

神代の昔、天照皇大神の岩戸隠れの際に天兒屋命と太現命とが此香久山の五百箇眞坂樹(いほつまさかき)を掘(ネこじ)にして、上つ枝には八坂瓊の五百箇御統(いほつまするま)を懸け、中つ枝

には八咫鏡を懸け、下つ枝には青和幣（あをにぎて）、白和幣（しろにぎて）を懸けて相與に祈禱（このひのみ）まをしたとある。如何にも古く尊い山である。

かれと想ひ、これと考へつゝ、次第に濃い夕闇に消えて行く山裾には遠く燈の影がちらついて來た。昔、この香久山の麓にあつたと云はれる埴安はにやすの池と云ふのは何の邊だつたらうと、尙も思ひつゞけて立つ。

もう先きへ行つても暗いから此邊で歸る事にしやうと、野の真中で歩をふりむける。今丁度私の立つ土には遠い昔の藤原京の香が、深く深く地の底に浸み込んでゐるのであらう。彼の衣ほすてふ天の香久山の歌は、此藤原京の宮から東南を望んで詠まれたものであると云はれてゐる。

その藤原京と云ふのは、持統・文武兩帝の都せられた地である。こゝで大化の新政が布かれ、物部氏倒れ、蘇我氏が亡び、藤原氏全盛時代を現出した地である事を想ひ出さずには居られない。奈良の都も此藤原京を御手本にして營まれたのであるが、今は何も偲ぶものとなない。

或る時の事、舒明天皇には天の香久山に登られて國見し給ふた事があると傳へきく。

「大和には群山（むらやま）あれど、

とりよろふ天の香久山、

登り立ち國見をすれば、

國原は煙立ち立つ。

海原はかまめ立ち立つ。

うまし國ぞ、

あきつ島大和の國は」

（萬葉集）

夕空に薄れ行く香久山を前面にすれば、左手の畑を越えて遙か北の方に、さきに近くで眺めた耳成山が小さくかすかに見えて居る。それを寫るか何うか判らないが、ベビーパールで寫して見る。

背中の方に畝傍山は近く黒く聳えて居る。最早此方面に向つてはカメラを手持で扱ふ望みがないので、三脚を持たぬ今は、カメラを地面に置くより外に望みがなかつた。



望遠山成耳

ベビーパール ヘクサー 3.8

フィルターなし

パン F フィルム

f 3.8 1/25 秒

幸にも私の足下の畑道は一面に美しい蓮華草の密集である。私は蓮華草を分けてそこをなるべく平らたくした。そこへベビーパールを置く。距離を1米の近くに合はせた。そして絞は最小の1/25に絞った。シャッターの針をBにした。これは随分思ひ切った露出と自分でも思ったのである。なぜ此やうにしたかと云へば、たとひ夕暮とは云へ野外でBで寫すのである。それにレンズから1尺と難れめところにある蓮華草を近景とし、而も近いとは云へ1/2キロメートルも距てる畝傍山を相當シャープに背景に利用しようと云ふ、一方光の困難に際しながら、無理の註文を心に描いたからである。其結果は圖の通りな(次頁)寫眞が出来たのである。



蓮華草と畝傍山

### 飛鳥川のほとりに立つて

世の變遷と云へば、直に昔の飛鳥川の歌が想出される。

「世の中は何かつねなる飛鳥川、きのふの淵はけふの瀬となる」

無常と云ふか迅速なる世の變り方、佛教の無常觀から後世到る所に引用されて入口に噲炙する歌であるが、徒然草にも

「飛鳥川の淵瀬常ならぬ世にしあれば、時移り事去り、樂しび悲しび行き交ひて、華やかなりしたりも、人住まぬ野らとなり、變らぬ住處（すみか）は人改まりぬ。桃李もの言はねば、誰と共に昔を語らん、まして、見ぬ古のやんごとなかりけん跡のみぞ、いと果敢なき」とある。

「昨日といひけふと暮して明日香川、流れて早き月日なりけり」（はるみちのつらき）などと云ふ歌もある。その飛鳥川は大和國の高市郡にあるが、橿原神宮行の電車を態々八木で捨てて



此町の西に近く走る所で飛鳥川の畔に私は立つて見た。

大型のトラックが砂塵を浴びせて飛鳥川にかけられた石の橋に漸時高まる道を登つて来て、道の端によけた私の汗ばんだ顔にも衿にも恐ろしくひどい砂塵を吹きかけて過ぎて行つた。

私は川の名に慕しみを感じて、目的もなくたゞ川に添つて少しく北に歩いた。私の背後には、近く南方に畝傍山が聳え立つ、それ以外は坦々たる野邊の景色が續いて居る。

こゝに私はカメラを取出した。又寫し了つてスケッチブックにも淡彩の畫をとどめた。

此邊りの飛鳥川は川幅漸く十間ぐらゐる。然し堤は割合高く、草は兩岸に繁つて、水は涸れて流れて居なかつた。淵には會はず瀬にも會はず、訪れた時が悪いのか、處を得ないのか知らないが、もつと此川の流域をゆつくり探ねて見たいと思つた。

此川の流れを地圖の上に求めるならば、遠く吉野の邊り高野山の北に源を發して居るやうに思つた。そして岡寺や橋寺、飛鳥大佛の附近を過ぎて、天の香久山と畝傍山の間を西北に走つて、こゝ八木の

町の西を過ぎ、初瀬川になつて平端の南西の野で大和川に合流し、大阪灣に注ぐものと思はれる。若し他日又、機會を得たならば、ゆつくりと其流域の風光と史跡とを訪はうと思つて居る。

五月半ばの日はかなり暖かく、否むしろ汗ばんで來る位であつた。私は散々飛鳥川の畔を歩き廻つた末、元の街道に出た。此道を西に行くと高田の町も程近いのである。

ふと南側の人家の間の細い道の曲り角に石の標柱を見出した。神武天皇御陵道と書いてある。そこで此道を曲つて桑畑道を氣任せに進んで、今井の町で鐵道線路を潜つて御陵にと向つた。



飛鳥川から見た畝傍山

ベビーパール ヘクサー 3.8

パン F フィルム

フィルターなし

f 3.8 1/25 秒

### 神武天皇御陵道を

神武天皇御陵道の石の道しるべから曲つて、今井町を横切つて南に清らかな參道を行く、電車線路を左側に見て歩む。時々牛車に會ふ。

ひとり黙つて春の野道を歩くのは睡氣を催すものだ。それに汗ばむ位の陽氣なので、時々ポケットからチェリーを出しては吸つたりして、足のまゝに自然前方に大きくなつてくる畝傍山を見て進んだ。

神武天皇の御陵は外から拜するのみである。柵を廻らす細い清らかな玉砂利の境内を鳥居の前から拜む。邊りは森嚴たる森、此森の中に我大神の御靈がとこしへに御しづまり給ふのである。何んと云ふ神々しいところであらう。



尊い道しるべ

ベビーパール ヘクサー 3.8  
パン F フィルム  
フィルターなし  
f 3.8 1/25 秒

此邊りに遠い昔々、壯嚴其ものともいふべき宮殿が建てられてあつたのであらう。それは永久に日本の礎石にまで確と根を据えられて、所謂「そまついはね底磐根に宮柱みやしらぎ太敷立て、高天原に千木高知りて」と云ふまさにその言葉にのこる通りであつたと想像されて来る。これをいづみ櫃原宮、こゝに辛酉の歳正月元日人皇第一代の帝が御即位の禮を擧げさせられたものである事は尊い極みである。紀元元年、正にそれから二千六百年の永い歳月を我々の日本は経過して來たのである。

御陵を後にして右に高く畝傍山を見あげつゝ行けばいづみ櫃原神宮である。私は先づ街の茶店に入つて、こゝに外套や帽子から手提鞆からカメラまで一切の持物を預けて、すつかり身ごしらへを整へ敬虔の氣持で參道を靜かに進んだ。眼の當り今拜する神社は今や近づく御盛典を前に御造營の事は愈々涉つて居るやうに見受けられた。

日向の國を出でさせ給ふた神武天皇は、大和を御平定あそばし、この地いづみ櫃原の宮に於て紀元元年二月十一日(舊一月一日)初めて天皇の御位に御即きになられた。奠都の大詔の内に

「くはのち六合を兼ねて以て都を開き、あめのした八紘を掩ひて宇と爲むこと、亦可からずや。夫のか畝傍山の東たつみのすみ南な櫃

原の地を觀れば、蓋し國の塊區か、治るべし」

と仰せられたのである。神武天皇が皇祖天照大神の御旨を承け給ふて、こゝに萬邦無比の國體の基礎が定まり、今や光輝ある紀元二千六百年の大式典を壽ぎまつる日に向つての歩が進涉しつゝあるのを見る。東亞に於ける皇國が、大陸國策の實蹟も既に大半舉り、全世界混亂の中に動きなき我が日本帝國の繁榮が眼の當り見られる事は、何んと申してよいやら、實に感激の極みと思つた。

### 樞原神域にて

昭和十四年秋 再度此地に來て謹作

黄金波打つ野を越えて

樞原宮に來て見れば

底磐根に建國の

我が大君の聖なる地

畝傍耳成香久山の

大和の國のあけぼのに

奉仕する人雄々しくて

見よ神域は甦る。

鋤<sup>すくわ</sup>鍬<sup>くわ</sup>光り地は開け

汗に至誠の芽は萌ゆる

心は一に結ばれど

皆それ〴〵の國なまり

あゝさまざまの世の姿

興きては亡ぶ外つ國の

類<sup>たぐひ</sup>に稀な皇國の

榮は二千六百年

今大陸の野に山に

故郷<sup>ふるさと</sup>遠く銃<sup>ついで</sup>をとる

幾百萬の武士<sup>もののふ</sup>を

照す金鷄の光かな。

されど千古の偉業には

常に大なる支障あり

我等此世に生<sup>う</sup>享けて

忍苦は男子の誇なり。

推古<sup>すいこ</sup>飛鳥<sup>あすか</sup>の寺々に

響くは夕べの鐘ならで

萬邦無比の皇國の

新建設の號鐘<sup>しらせ</sup>なれ。

## 久米仙人の寺

大軌電車の神宮前驛の直傍に一つの陳列館がある。こゝには古い大和の地下から發掘された土器や人形の類が澤山に見られ、當時の文化のあとや風俗の一端が知られて興味は盡きない。

その陳列館に沿つて南に一丁程を歩むと、こんもり繁つた木立の中に古寺がある。もう此道は吉野街道で、ずーつと街道を旅して行けば壺坂寺を過ぎて吉野山に行くのだ。私は石だゝみの徑を少し上つて餘り廣くもない境内にきた。いくつかの堂宇が建つて居り、随分荒廢はして居るが、縁日のやうな露店などが少し出て居り、又茶店もあつてかなりの人出に賑ひ、思つたよりも陽氣な感じがした。

こゝは久米仙人の傳説で有名な久米寺であるが、檀原神宮を拜してこゝに氣づかず歸國する人が割合多いらしい。

歌舞伎にある久米仙人の舞臺は陽氣で派出な面白い踊を見せるが、劇藝術に化せられてこそ一種の

憧れが持たれる。然しこゝはそれから考へれば淋しい。

荒廢した古寺であるが、成る程千三百年以上も古い推古時代に起る寺だけの落つきはある。勿論建物はそれ程古いものではない。私は芝居の久米仙人を想ひ浮べながら、坊さんの一人に其由來を尋ねて見た。芝居で見たやうに仙人が下界の吉野川のほとりに洗濯して居た女の白い脛を見て、雲から下つたが、心の穢れで神通力を失つて天に歸れなくなつたと云ふやうな話はしてくれなかつた。だが其昔仙人はこゝの境内になつて居る土地に天下られ、二百年程住み、長壽の秘法を此世に残して再び昇天されたと話してくれた。夢のやうな傳説が寺の由來記に何か記してあるかと思つたので、手當り次第に刷り物を求めて此寺を辭した。

## 長谷寺と談山神社附近

大和の野を巡り歩いて、いつか長谷寺を近くに見るところへ来た。此時も暮色既に濃く、寺を訪れるには遅いので、カメラもスケッチも思ひとどまつて、黙然と今日の泊りは何處にしようなどと考へながら行く。天候と時間次第でつまらぬ景もよくなる。寫眞などの旅では光線次第で氣も進み、又折角の撮影豫定地も思ひ切つてよしてしまふ事などは常の事である。それ故、寫すプランは豫めたてて行くものゝ、其場の状況次第で、勝手に變更してしまふのである。況して日常極まつた勤めを持つて居り、休暇や日曜日を當てにして歩く人々は、列車の時間から滞在の時間など正確に豫定通り歩く譯だから、左様な人達は天候による影響が寫眞の上にはかなり大きいと云はねばならぬ。

然し、私は其點割合自由である。自由の爲に氣まゝも出、却つて豫定したとは別の地に方向を轉じてしまふ事なども多い。今日もそれだ。こゝ長谷の邊りから三輪の附近へかけて一帯の地は奈良時代には官臣達が盛んに野の遊びをして暮らしたところなのである。

櫻井の或る宿に思ひがけぬ一夜を過して、翌日は多武峯（海拔六一九米）を見あげる野に立つた。鎌足公を祀る彼の談山神社に參拜する。中大兄皇子に御相手して蹴鞠の催に際して蘇我氏の專横に對する謀をされた話を想ひ出す。お社とは云へ、寺らしい建物の風貌、それは成る程昔は寺であつたのが、明治維新に神佛混合を禁止された時神社とされた事によつて判る。神社の背後の山は、所謂御破裂山と云はれた。國家に大事がある時には鳴動すると傳へられる。兎に角此附近には今こそ活火山はないが、大古の火山が澤山あり、二上火山群などは山の研究家などにも歴史と結び面白い材料になるかも知れないと思ふ。

## 奈良の旅籠屋

「借駕籠に日を送り、奈良の旅籠屋三輪の茶屋、五日三日夜をあかし、二十日餘りに四十兩、遣ひ果して二歩残る、鐘も霞むや初瀬山……」 淨瑠璃の『冥土飛脚』で梅川忠兵衛が談る三輪の茶屋と云ふのも、前に記した大和三山の内の耳成山の東方にある三輪の町に今もそれと云つて残つて居ると云ふが、こゝに私の記すのはそんな由來のあるものではなく、ほんの私自身が度々奈良に来て泊つた二三の感想を述べて見やうとするに過ぎないものである。

奈良へ来て靜かに一夜を安眠したいと思ふならば奈良ホテルが理想的である。但し洋食を好み、洋風のベッドにねむれる人であつて、洋式のバスで入浴する事に慣れて居ると云ふやうに、すべての點で純西洋風のホテルに泊りつけた人でなければ向かない。私は此ホテルの食事が好みに合ふし、靜かな其ヴェランダの眺めが好きな爲に大概こゝに泊るが、時には變つた所に見たいなども思ふ。



眠る前

靜かな奈良ホテルの夜である。私は旅で必ず記念に自分を記録する事にしてゐる。此寫眞は自分に氣に入つて居る作品の一つである。

ロライフレックス 4×4  
イゾパンフィルム  
f2.8 1秒  
セルフタイマー

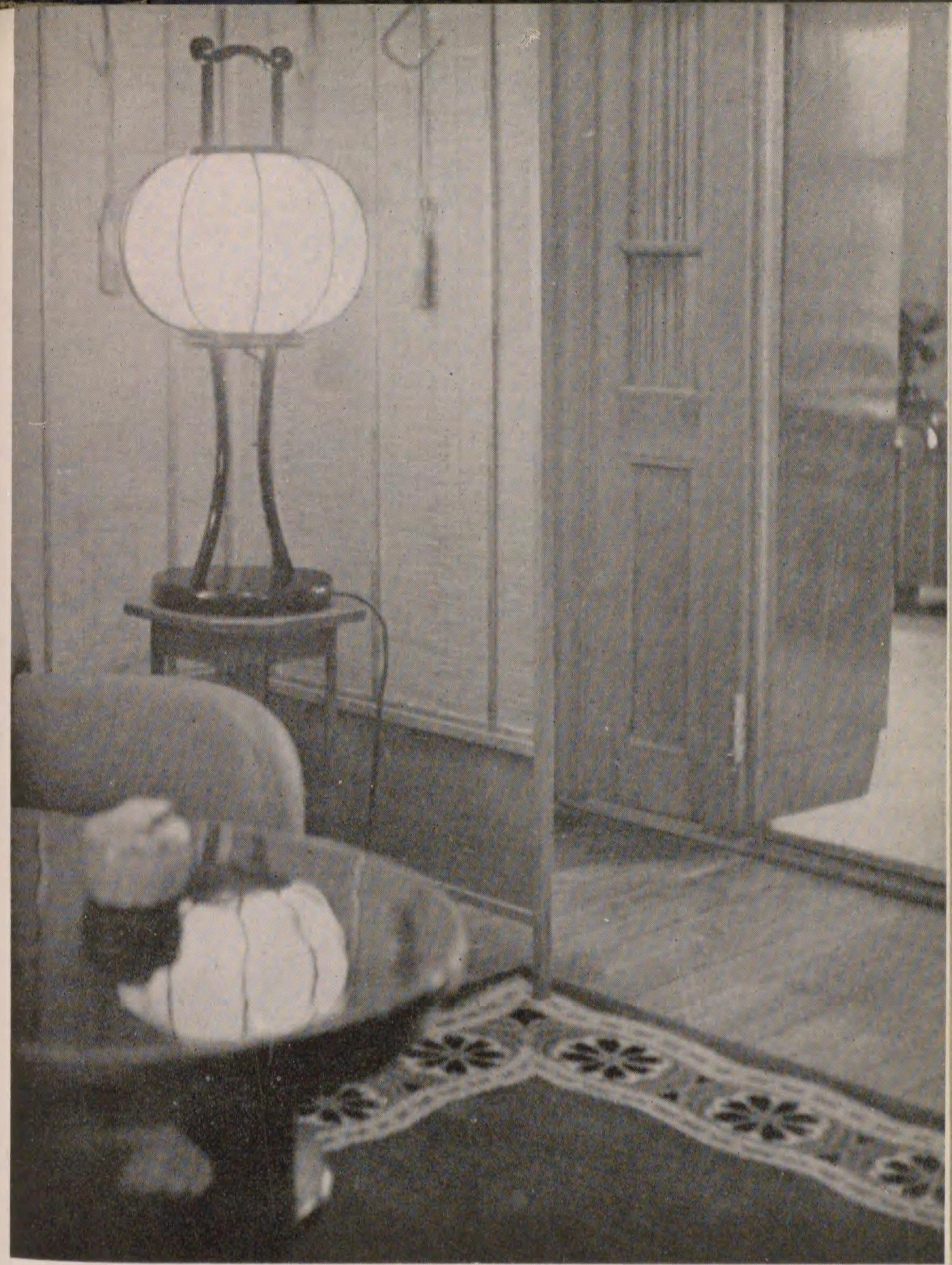


つい此の間春の旅の時に、電車驛に近いもつと安直なホテルに態と泊つて見る事にした。こゝで私は豫想外な安い宿泊料で一夜を過したが、室も汚なかつたし、入浴はたうとうやめた位であり、殊に便所などの粗末さには呆れたが、日本風の旅館の半分にも及ばぬ宿賃なので我慢する事に極めて、室を一見してから荷を置いて、場合によつたら何處か外の日本式旅館に移るつもりで、早や暮れて間もない奈良の街中を歩いた。

猿澤の池畔、丁度興福寺から見れば對岸の方角には奈良一流の大旅館が並んで居る。私は實は最初其或る一軒を心にかけて居たのであつた。

猿澤の池の春の夜は又譬へやうもなく心地がよい。朧月夜の晩であつたし、明るい電燈で青柳の糸のやうに長く水の面に垂れた枝には、月がからんで揺れて居る。そこには奈良見物の人々がドテラ姿で方々に佇んで興福寺の塔の方を眺めて居た。私は前の洋式ホテルをよせばよかつたと思ひながら、旅館街に來た。

ところが修學旅行の中學校らしい年輩の男女學生の團體で、殆ど其邊の旅館と云ふ旅館には一杯で入れぬ程に割當てられて居る模様であり、或る一軒の宿の支關には、其一團が不安げな顔で先生を取



奈良ホテルの夜

玄間の片隅の椅子に坐つて明日の計畫をして  
ゐた。静かな夜である。



### 猿澤の料亭

猿澤池畔に和風の堂々たる旅館や料亭が並んで居る。堤に立てば足下に春日野から流れて來たらしい美しい小川が、潺々と芝生の間を走つて居る。たゞ私は俗悪な三味の音がなくばと感じた。

コライフレックス 4×4

テツサー 2.8 付にて

巻いて騒いで居る。聞くとまなしに聞けば何か盗難があつたとかで其詮議中らしい。一方女學生の方は流石に静かに皆な疲れたらしい面持で部屋に一杯集つて居るのが見える。

それはよしとして私が實に意外に思つたのは、此學生の團體の泊つて居る同じ旅館の一方の部屋では、何處から來た團體だか知らぬが、此事變下に卑俗な三味線を交へての底抜け騒ぎである。あゝ私は此有様を學生達に、ちよつとでも見せたくないと思つた。同時に私自身が幸にも今夜此邊に宿をとらなかつた事を實に心から嬉しく思つた。

早速そこを立去つて態と暗い池畔の道を求めて、夜の静まり返つた興福寺の塔の下に一人歩を進めて見た。今の思ひがけぬ不快な感じを早く忘れたかつたからである。

燈火の無い興福寺の境内は、奥へ行くほど愈々淋しい。私は歩み疲れて初めての安宿に戻つたが、粗末なりとてその宿の夜は終電車の後には音一つしなかつたので楽しく翌朝まで安眠が出来た。

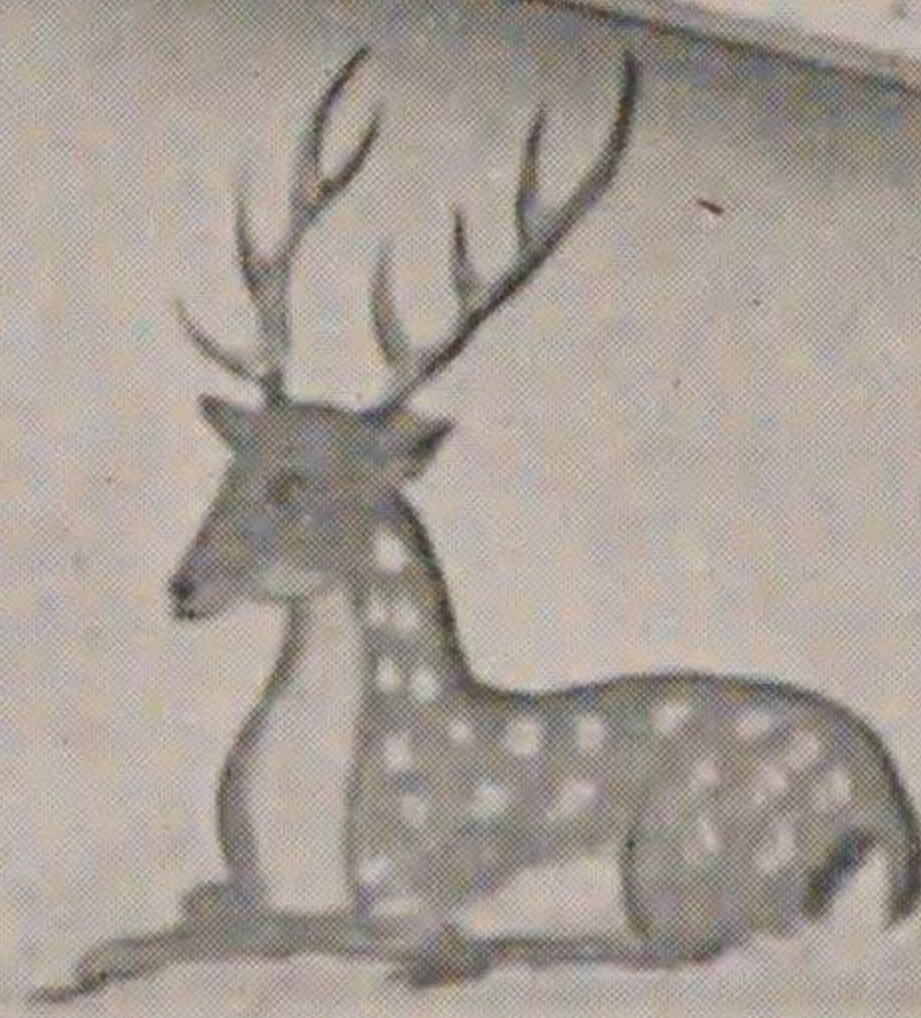
又奈良の附近を歩いて私の最も困つた事は都會人たる私などが、心から氣に入るやうな簡單ながら



ロライフレックス 4×4  
テツサー 2・8  
パン F f 5・6 1/25 秒

曇  
り  
日

猿澤池畔は何んとなく落つきがないところだか、それ  
でも晴れた日など此邊を一人ぶらりと歩いて見るのも  
よい。旅にあると云ふ事を忘れてベンチに腰かけて奈  
良の昔を考へたりするにはよかつた。



注意

ツル  
角アル鹿ハ危イカラ

用心シテ下サイ

注意  
一 壯鹿 前方ヲ通ラナイ様ニ  
一 間道ヲ通ルト危険ナス  
一 餌テ鹿ヲ釣ルハヨシテ下サイ  
一 鉄レコトハ怪状ニ基テス  
一 老幼婦人等用心願ヒマス  
一 呉々壯鹿巡行ニ係リテ下サイ



(ライカ エルマー)

きれいな食事をするとところが無い事である。

彼の立派な法隆寺へ行つても櫃原方面を歩いて、清潔で軽い食事をさせてくれるところが無いのは不思議なくらゐである。

私の考では私鐵電車の終點又は交叉點の驛の構内などに、是非會社自身の經營でカレーライスにコーヒーとかトースト、又は何々井と云ふやうな程度のもを、清潔な設備を以て食はせて貰ふ事になつたらこれ程助かる事は無いと思ふ。

それが經營上無理とならば、せめて國策に添つた代用食たるうどんとかそばとかだけでもよい。是非さうしたサービスは欲しいものである。

私は前に度々懲りたので、カメラ其他を入れる鞆の隅に乾パンの一包を入れて歩くが、これと共に茶を一杯呑みたいと思つて茶屋を探しても無い土地が多い。

折角旅の者を遠國から招きながら、肝腎な食事の設備をして居ないので此くらゐ困る事はない。従つていつも私は一日中散々に歩き廻つて疲れ空腹を耐へて奈良ホテルなどに轉げ込むやうにして

ほつと人間らしい氣分に返り、漸く元氣を恢復すると云ふ始末である。

尙最近の旅で嬉しかった事は、奈良縣教育會編纂になる旅の讀本『大和』と云ふ定價十五錢の小冊子を何處でも賣つて居た事である。忙しく歩きながら、簡単に繙いて見るに便利な此案内書を未だ知らぬ方々におすゝめして置きたい。同時にこれと共に参考にして見る便利で正確なよい遊覽地圖を販賣して貰ひたい。地圖は色々賣つて居るが、従來のものはどれも長し短しで、やむを得ず全部求めて比較したが、未だもの足りない感が多かつた。澤山ありながら、眞に據るべきものがなければ求める人は迷ふばかりであると思ふ。

單に寺の由來や徒らに年號のみを並べず、簡単に傳説や文學や文化上注意すべき事など、一見して知られるやうに書き加へられたいと思つた。

## 奈良とカメラ

東京の盛り場などで盛んに活躍し、其性能の良さを充分に示してくれたライカやベビーパール等がこゝ奈良に来ては、少からず物足りなさを感ぜしめる事が多かつた。それは餘りにも迅速に無造作に撮れてしまふからである。

然し人通りも少く、邪魔物もなく、寫す目標が主として建物とか野外の風景と云つたやうに、それ自身動く事もなく、悠々三脚を用ひて、一枚に一日を費しても差支ないやうなところでは、もつと落ついてピントグラスの中で何かれと寸分の隙のないまでに、像に對して研究し、構圖の極め方、光の扱ひ方、ピントを何處に合はせるか、さては絞の大小とを加減して、畫の趣を任意に工夫して見られぬやうなカメラの方が何うも適するやうに思はれる。



奈良より歸りて

さう云ふ意味でロールフィルム用のスケッチカメラよりも、寧ろ簡單ながら自由の利く乾板用の手提カメラとか組立カメラとか、一眼レフ、或は二眼レフなどがよいと考へられる。

私は今迄色々用ひて見たが今後はレフのみで試みやうと思つた。殊にレフでは味のある畫が出来る。フィルムはパンクロでもクロームでもよいが、整色性の豊なものでないと多彩の建物などは感じが暗くなつて面白くない。

又フィルターは赤色を用ひるに及ばないが、是非二號か三號ぐらゐの黄色を用ひるやうにしたい。さもないと建物や美しい森や雑木林や、草原といふやうなものは割合に暗く、木の間から見える天空のみ徒らに明るすぎて面白くないものになるであらう。

私はあまり三脚を用ひなかつたが、三脚を出来るだけ用ひて、一枚でも身を入れてよい作品を作るやう氣永に工夫した方がよい事は勿論である。

建物などは平面的の撮影では何うしても物足らぬ。是非普通のカメラを用ひる場合にも、一度の撮

影が済んで、もう一度六・五センチ程傍らにカメラの位置を移動し、同じ目標に同じ条件で寫して、此の二枚で一組の双眼寫眞即ちステレオとして後に立體的にして眺めて、研究資料にするやうにおす、めして置きたいのである。此具體的方法是既に拙著『ベーパー』書中にも掲げてある通りである。

フィルム等の携帶量はなるべく豊富でありたい。寫すものは多いが、使ひ果した時には、ちよつと奈良市中や郊外などでは賣つて居ないからである。奈良市では驛に近い商店街の寫眞材料店、又は奈良ホテル内では其賣店で得られるぐらゐで、名所廻り中では得られない。郊外では郡山の町に材料店を一軒見かけたが、他では餘り見當らなかつた。

又佛像や寺の建物等、國寶に屬する貴重な寫眞は、奈良博物館前の飛鳥園の賣店で求める事が出来る。私達は寺を遠く野邊から寫せる程度にとゞまり、其細部や美術品、佛像等は寫せぬから、たとひ自分が寫したのでなくとも、之等の寫眞は一通り求めて來るに越した事はないと思ふ。

### 何故寫眞撮影を禁ずるのか

私は今想を古い奈良の都に馳せてゐるが、奈良の都は人も知る如く第四十三代元明天皇の御代即ち皇紀一三七〇年から始まつて、元正、聖武、孝謙、淳仁、稱徳、光仁と歴代の御代を通じて七十五年間程の間を云ふが、實際には此間の事のみ考へて居るのでは足りない。もつと半世紀も昔に溯つて、欽明天皇の御時あたりまで充分研究して見なければならぬ。のみならず奈良朝の後の平安朝の時代までも續けて見て行かないと連絡がつかず、完全なる理解は得られないと思ふ。

奈良朝初期の世界と云へば、歐洲ではサラセン人が盛んに活躍して居り、東ローマ帝國の榮えた頃で、要するに歐洲は未だ何うにも定まらぬ暗黒時代と俗に云はれる有様であつた。今の朝鮮は新羅の世、また其頃の支那は、隋が亡んで唐の支配下であり、有名な玄宗皇帝が位にあつた。つまり今紀元二六〇〇年から見れば、一二三〇年も古い昔の事になるのである。

私共が斯うして日本國民として奈良の舊都を慕つて或は杖を曳き、或は研究に志すにつけて想ふ事は、よく今日まで、此尊い日本の文化がこゝに残つて居たものであると云ふ事である。

258

然しながら幾多尊い當時の建築物、或は佛像、寶物、美術品、日常の用度と云つたやうなものが、或は風に地震に火災などの天災により、或は戦亂により、或は紛失により、或は自然の風化作用などによつて、少からず失はれて居る事は論をまたないであらう。

けれども一方又今日までの爲政者が志を一にして其保存に時の治亂を問はず、腐心して來た功績に並々ならぬものがあつた事は歴史にも明らかなることである。

勿論現在に於ては我が科學者が全智腦を集中して一層の保存を完璧ならしめては居るが、將來の天災を考へる時は、未だ其心配は決して少いものではないと思ふ。

既に移動して差支のないものは各所の寺々から博物館に移管されて居るが、建築物等などは時折の修理によつて辛くも原形をとどめて居る有様である。若しそれが先年の室戸颱風の如き大暴風雨により、或は火の不始末等によつて焼失さるやうな不幸なる事態に相遇したならば、最早取返しがつかぬであらう事を心から危まめ譯には行かないのである。

その一つの對策としてせめて寫眞などを以て出来るだけ多く現状をとどめて置きたいものと常に思ふのであるが、今法隆寺にせよ東大寺にせよ何處の寺にせよ、吾々が行く先々には必ず撮影禁止とか撮影嚴禁などと云ふ建札が眼につくのである。私は實に心ない事だと思はずには居られない。何故人でも多くの人によつてカメラにそれをとどめさせないのか。私は決して撮影が不利を來し、損傷を與へるとは考へられない。強ひて思へば、撮影の許可を得て居る一部の權利者の商賣に、幾分の支障を來すのみとしか考へられぬ。今大局から考へて、是非此種の禁制は全國的に廢除して貰ひたいのである。却つてそれが國寶的重要美術品、建造物に對する正しい理解であり、處置に外ならぬと思ふのである。

私個人から云へば、現在見る寫眞は實に幼稚な記録にしか役立つて居ないと思つて居る。大體に於て、立體的の建築物、彫刻品美術品を寫すには平面的の寫眞で満足して居る事は間違つて居る。彼の美しい佛體の線と丸味、それこそ私の永年唱導して居る實體寫眞、即ちステレオの世界であるとしか云へない。又彼の巧みなる建築構造もステレオの機能によつてこそ完全なる記録が残され、これより満足の記録法は他に求め得ないのである。

259





奈良のアルバム

私は既に出来得る限りは此方法によつて撮影してあるが、さりながら肝腎な部分は今云ふ通り禁制と云はるゝまゝに残さんにも其すべがないではないか。世にこれ程過まつた考はない。如何に考へるも残念で諦らめ切れぬ。此際切に當局の人々の深慮に訴へたいのである。

否私のみではなく、實に一般の人々の氣輕に寫す寫眞の一枚が、如何に其人の心を永く奈良の美に結びつける力があらう。又知らず識らずに祖國の尊い美術に對する愛着と研究心を喚起する大なる力になるか、それも考へて見なければならぬ。此問題は何處の役所が關係するものか、それが果して眞面目に考へて呉れるものか、全く私には判らないが、一日も早く再認識して、理解ある適切な處理を以て吾々研究者に満足なる道を啓き、一方世のため皇國の爲に貢獻出来るやうにして貰ひたいと紙上を以て心から叫んで置く。

## あとがき

茲に私は一先づ本書の執筆を了へる事にするが、私は未だ奈良の佛像の研究も、古美術、古建築の研究にも、其他一切の文化、風俗、思想、宗教、戦記、文學、何もかにも殆ど觸れて居ないと云つてもよい。それは到底私の如き淺學の一旅行者にしては覺束ない程研究の方面は廣く、又底知れぬ深さがあるからに外ならない。否専門家がそれぞれ一生涯かかつて手分けして調べても及ばぬであらう程に、奈良朝の文化は高く材料に富んで居るのである。

たゞ私はこの地を心から好む一旅行者としてカメラを扱ひ繪具箱を開き鉛筆を振るひなどして、自分の好きにアルバムに集めただけのほんの奈良の表層に觸れて、たゞ獨り喜んで居るだけのものに過ぎないと思つて居る。

けれども時々私のこれまでの断片的な此地の記事に、私と同じく奈良に興味を持つて下されて、もう少し餘計に書くやうに勤めて下さる讀者諸君が割合に多いので、幾分なりとそれに御答へする意味で恥かしくも先づこれだけを纏める事にしたのである。御承知の通り、今は印刷上に多大の困難があつて私の思ひ通りのものにならないが、他日又豪華版でも出来るやうになれば、改めて本書の續篇を出版するつもりで居る。それまでに私はもつと勉強して寫眞も上手になつて置かうと考へて居る。

今私は本書の執筆を了つて久し振りでレコードをかけて居る。ユロムビア盤の『越天樂』の雅樂がそれであるが、頭腦に奈良朝を描きながら此レコードをかけて見る時は、一層氣持ちが落ついて何んとも云はれぬ、日本人たるの有難さを覺えて來る。御持ちになる方は是非試みられたい。

未だ筆を措くのが残り惜しい程記したい事があるが、これで思ひとまる。

兎も角も本書が輝く紀元二千六百年度の私の第一次出版となつた事を心から喜んで居る。又此意義深い年の本日、即ち三月一日日本書校正終了と時を同じくして私は次男を大陸に送り、御國の爲に幾分なりと國民として御奉行の義務を果す事になつた事を此上ない光榮と満足して居る。

吉川 速男

カメラの旅・奈良



定 價 ￥ 2.5 0

昭和15年5月6日印刷  
昭和15年5月16日發行

著 者 吉 川 速 男

發 行 者 北 原 正 雄  
東京市牛込區東五軒町三九

印 刷 者 若 林 吉 郎 兵 衛  
東京市牛込市谷加賀町一ノ二

印 刷 所 大 日 本 印 刷 株 式 會 社

發 行 所 玄 光 社  
東京市牛込區東五軒町三九  
振替口座東京一七〇六三番  
電話牛込(34)三三〇六番

# 式關 サロン露出計

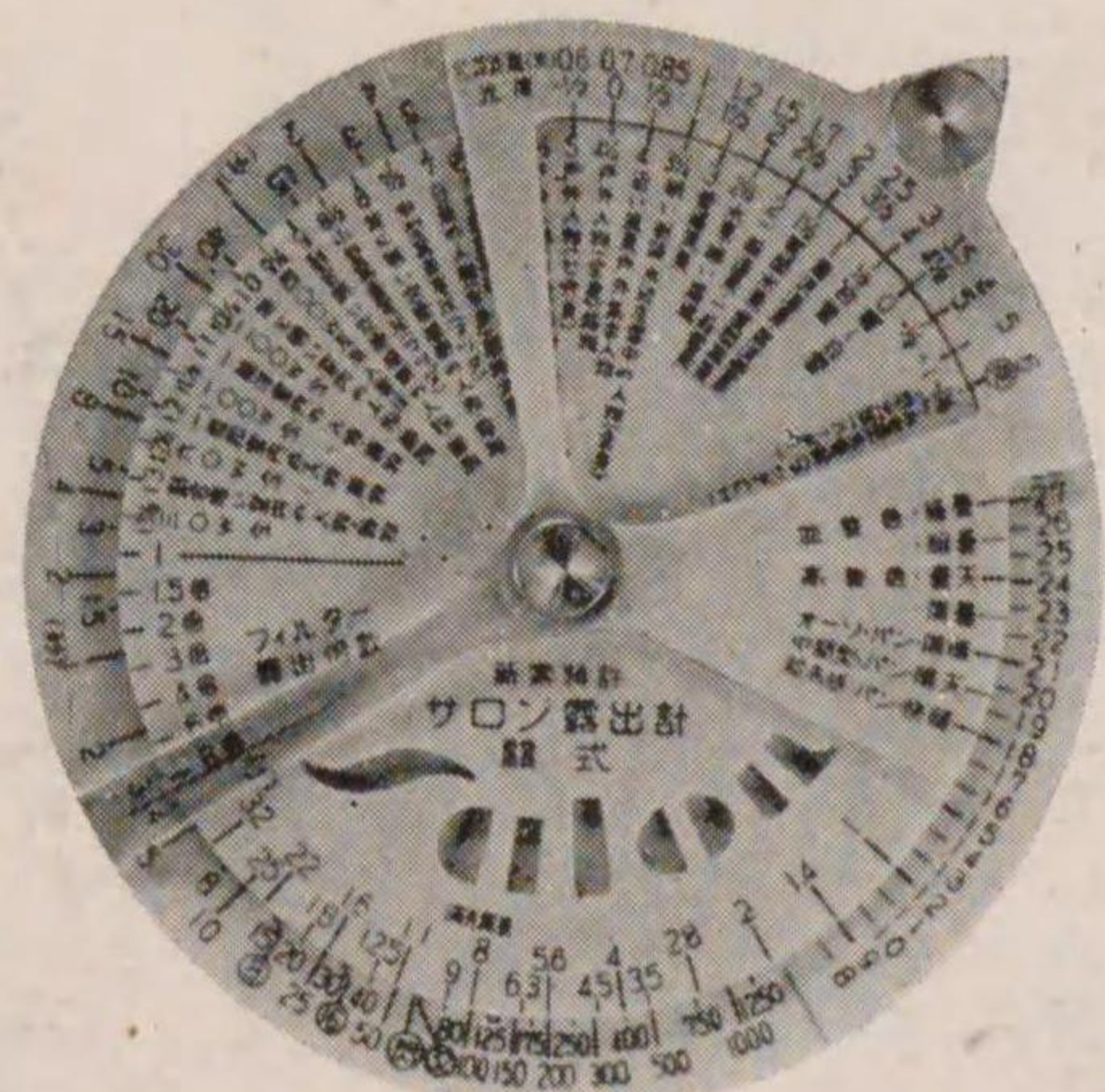
晝でも夜でも

片手一回で適正露出!

フィルム飢饉の時局下に白熱的大好評を博し、壓倒的歓迎を受けた今までの晝間専用のものに更に一大生彩を加へた驚嘆すべき世界的發明品! 即ち晝間は勿論、夜間の凡ゆる場合——月光撮影、人工光下撮影、即ち普通電球、寫眞電球、閃光電球、閃光粉、閃光球及び一般室内、喫茶店、ショーウインド、夜景、レビュー、演劇、花火等の露出が、簡單且迅速な操作で即座に分る、而も指示數値の正確と應用範圍の擴大、價格の徹底的低廉、電氣露出計を凌ぐ全寫眞家必携の露出計は是! 初めて完成された露出計の決定版!

!音福の家眞寫全!賣發・成完々愈型新の望待

(名有・店貨百國全)  
リア=店機眞寫



詳細使用説明書付

¥ 2.20

(晝間専用)  
¥ 2.00

送料 内地 .10  
内臺・樺 .27  
鮮 .42

發賣・玄光社

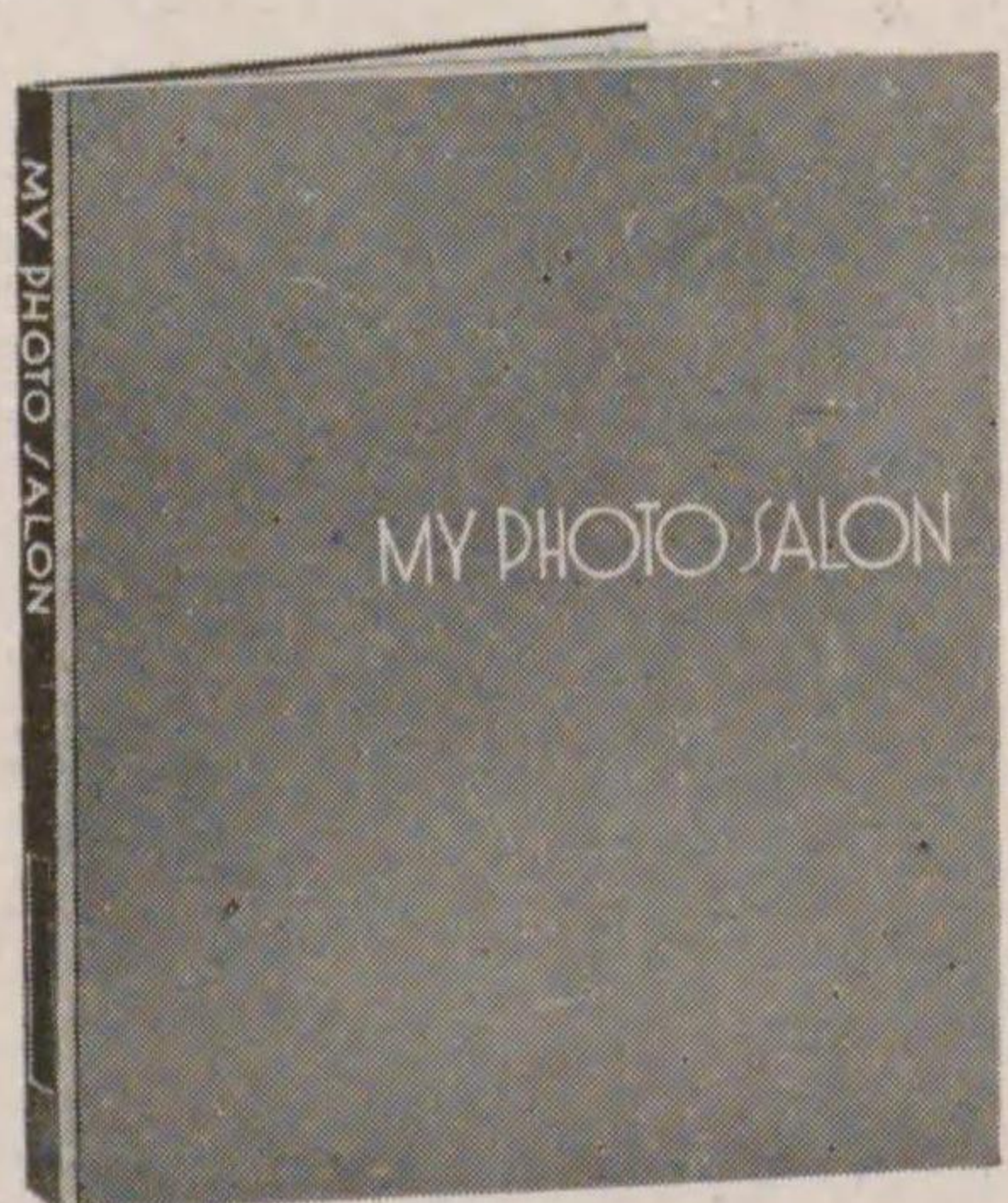
# サロン・アルバム

近代的感覺を持つ

獨創的豪華アルバム!

旅の想出、我家の記録、愛兒の成長……  
サロン・アルバムは貴方の傑作集の最も豪華な保存方法として生れました。  
紺碧の最上特選パレス生地、銀箔押し、蕭洒な近代的デザイン!  
而も斬新な意匠を凝らした表題記入用の扉の想入的挿入!  
サイズは殆ど正方形に近く、大型四つ切り印畫を自由に編輯貼付して而も悠々たるスペースを持たしめる爲めに、紙の取り都合の不利益を無視した飽くまで藝術的良心から成された獨創的的新型!  
苦心の傑作もアルバム次第で見劣りがしますが、このアルバムなら心配無用! 必らず満足されます。

導指御 = 並獎推生先男速川吉



四ツ切用 (37 × 35 CM) 三圓〇八錢

送料内地 .二二 臺・樺 .四七

カビネ用 (23.5 × 22 CM) 一圓六〇錢

送料内地 .二四 鮮・滿 .六二 臺・樺 .三四 鮮・滿 .四四

發賣・玄光社

(各材料店ニアリ・品切ノ節ハ乞直接御註文)

吉川速男著

ライカの旅

新四六倍 三・〇〇 送料・一四

カメラと機關車

新四六倍 四・二〇 送料・二二

アルバムの纏め方

新菊判 二・六〇 送料・一四

カメラ・ハイキング

四六判 二・五〇 送料・一四

近接撮影

新四六判 二・五〇 送料・一〇

寫し方全集

四六判 二・五〇 送料・一四

たゞ漫然とカメラを携へて旅に出るのでは決して興味ある作品が出来るものではない。本書は旅の寫眞のプランの立て方や撮影法、作畫法、又はアルバムの纏め方等、著者一流の旅の寫眞術の實地指導書！

年長けても機關車には尙吾々の夢がある。是は凡ゆる撮影技術と作畫法を動員し、思ふ存分新しいカメラ感覚に依て美化された列車の種々相！機關車に對し崇高な愛着と熱情を傾注されてなる一大繪卷！

アルバムの重要性に對して今程強く再認識された時はない。而もそれには本書の大きな指導性を没却する事は出来ない。アルバムを如何に纏め、如何に編輯するか？ アルバムを買ふ前に先づ本書を讀め！

現下ハイキングの意義や重大である。而もカメラを携行する事は其内容をより一層豊富にする。では何を？ 如何に寫すか？ ハイキングの貴重なる收穫を一層光彩あらしめんとする愛好家必讀の快著である。

接寫の魅力は今や寫眞界に新しい興味を捲起しつつある。手持のカメラを如何に活用すれば接寫に成功するか？ 最も容易な最も實際的な方法は？ 廣汎精緻な接寫法が一讀立ち處に活用出来る。

凡ゆる被寫體に對し、近代的寫眞術の立場から悉く明快な解答を與へたもの、平たく云へば「何をどう寫さうか」の問題を、一々の場合に一目瞭然に分るやう被寫體別に寫し方のコツを詳述されてある。

パーレットの第一歩

新四六判 一・五〇 送料・一〇

私のベビーパール

四六判 二・五〇 送料・一四

ベビーパールの第二歩

四六判 二・六〇 送料・一四

イコフレックスの寫し方

新菊判 二・五〇 送料・一四

圖解寫眞術初歩

四六判 一・五〇 送料・一〇

百%にカメラを活かして駆使する時、機械の低級、高級は既に論外である。國産大衆カメラ・パーレットも其の場所を握れば優に一流機に匹敵する。機械的部分的改造法から凡ゆる寫し方を詳述された。何時如何なる時もベビーパールはポケットから離れた事はない。それ程著者の愛を獨占して來たベビーパールである。凡ゆる辭、短所、それにも増した長所を知悉せる著者の實際的使用法の指導書である。

『私のベビーパール』の續篇。その根本的扱ひ方より一步進めて極度までの活用法を述べた高等課的驅使法！その性能を十二分に活しライカやロライにも匹敵する仕事を試んとする人必讀の新研究である。

イコフレックスは寵兒二眼レフ中の新氣鏡である。著者は其の愛用者の一人として同機に關する總ての問題を檢討し、特に豊富な作例と共にその蘊蓄を披瀝し以て同好寫眞家の絶好の指針をなした。

寫眞は斯くすれば一番早く覺えられるといふ方法を明示したのが本書である。見て直ぐ分り、讀んで直ぐに要領が呑み込めるグラフィ式寫眞術入門書で、幾多の項目を一々手に取つて教へる如く解説された。

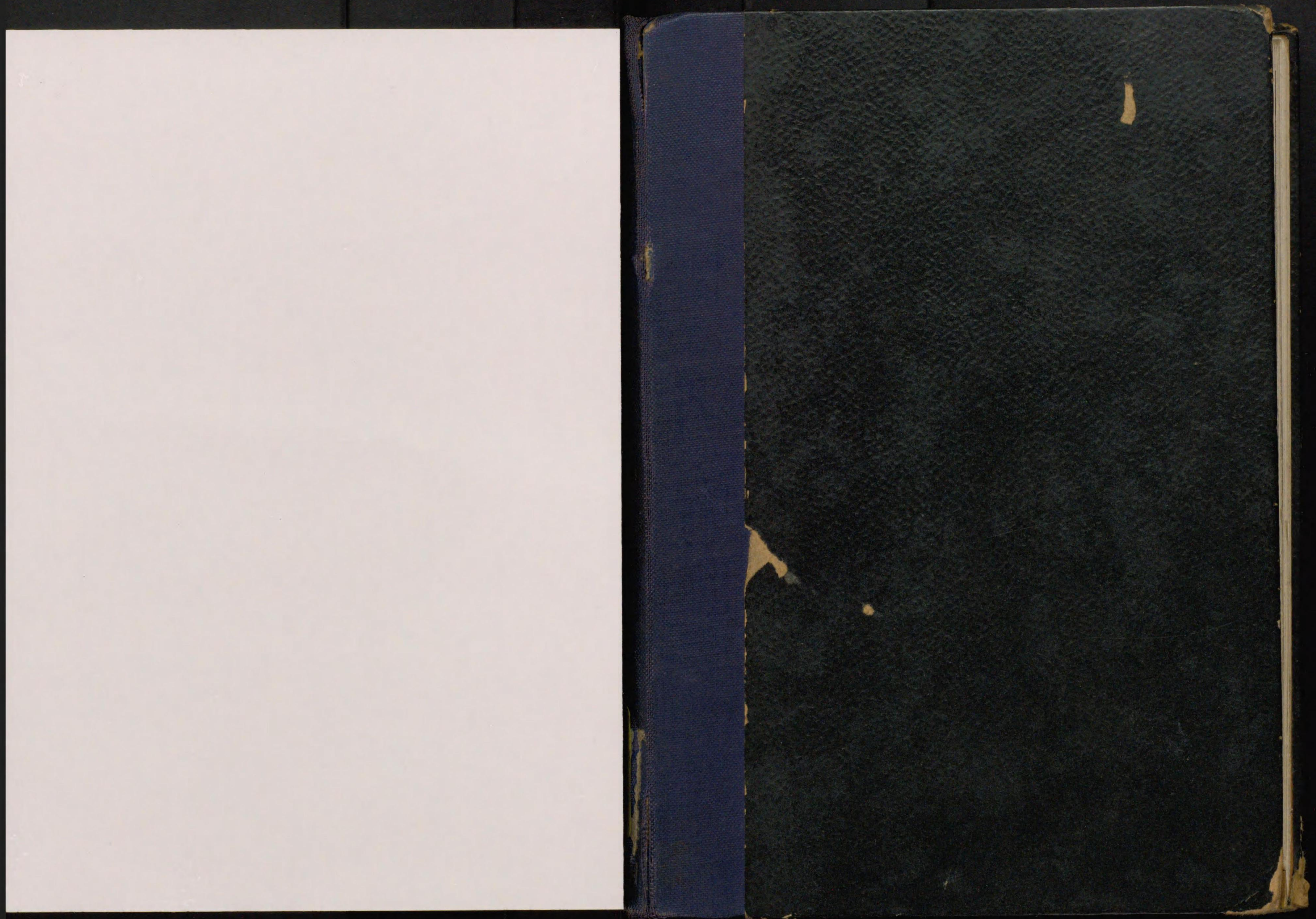
吉川速男著

773  
94

新刊並ニ重版書

書名	著作者	形態	定價	送料
近接撮影	吉川速男	新四六判	2.50	.10
春の寫眞の寫し方	眞繼不二夫	"	1.50	.10
夏の寫眞の寫し方	眞繼不二夫	"	1.50	.10
秋の寫眞の寫し方	下島勝信	"	1.50	.10
冬の寫眞の寫し方	下島勝信	"	1.50	.10
女を寫す	眞繼不二夫	"	1.50	.10
スポーツ寫眞のコツ	關三穂	"	1.50	.10
戸外人物の寫し方	野崎昌人	"	1.50	.10
コンタックス撮影全集	原正次	四六倍	5.00	.22
ロライ・テクニク	岡本守正	新四六倍	3.80	.22
ライカ撮影全集	眞繼不二夫	四六倍	4.20	.22
構圖と作畫の實際	冬木健之介	新菊判	2.50	.14
引伸作畫の實際	上條春雄	新菊判	2.80	.14
やさしい寫眞化學	南實	新菊判	2.20	.14
整色寫眞の實際	森芳太郎其他	特殊菊判	2.50	.14
人物寫眞の狙ひ方寫し方	眞繼不二夫	"	2.50	.14
スナッフ寫眞の狙ひ方寫し方	渡邊義雄	"	2.50	.14
小型カメラの寫し方使ひ方	木村伊兵衛	"	2.50	.14
風景撮影の實際 II	下島勝信其他	"	2.50	.14
撮影の實際	長濱慶三其他	"	2.50	.14
各種撮影の實際	高田皆義其他	"	2.50	.14
人物寫眞の寫し方	熊谷辰男	新菊判	2.60	.14
修整の實技	久米福衛	菊判	4.80	.22

773  
94



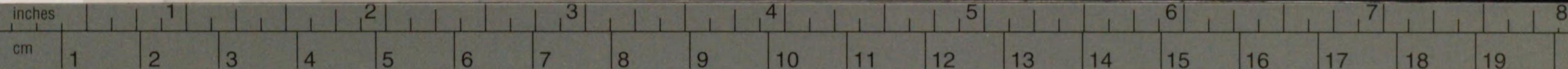


# Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

**A** 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



# Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

